

## ヨハネ第一 2：18節についての考察

最終 時点  
Παιδιά, ἐσχάτη ὥρα ἐστίν  
Last hour it is

反キリスト 来る (エルケ-タイ)  
καὶ καθὼς ἤκούσατε ὅτι ἀντίχριστος ἔρχεται  
and just you heard antichrist coming

今 反キリスト  
καὶ νῦν ἀντίχριστοι πολλοὶ γεγόνασιν,  
and now antichrist many have developed

最終 時点  
ὅθεν γινώσκουμεν ὅτι ἐσχάτη ὥρα ἐστίν.  
from which we know Last hour it is

ヨハネ第一 2：18節は、2つの接続詞と1つの関係代名詞で繋がっています。

また、「終わりの時」と「反キリスト」という表現が2回出て来ます。しかし「今」という語は一度しか使われておりません。それで「今は終わりの時です」と訳するのは、かなり意識と言えらると思います。原語に比較的忠実に訳されていると思えるのは新共同訳です。

(原語の単語数や並びを比較してみてください)

子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。(2:18 新共同訳)

原語から直訳的に訳すとおおよそこんな感じになるかと思えます。

「子供たちよ、それは最終時点です。

そして、ちょうど、あなた方は反キリストが来るのを聞いていた。

そして、今(すでに)、多くの反キリストが起きている。

それによって私たちは、それが最終時点であるのを知るようになる。」

「終わりの時」についてですが、ギ語：エスカター オラ 英語：Last hour

(ギ語：オラは英語のhourの語源となっています。)

一般に「終わりの日」と訳されているのは、ギ語：エスカター エメラー 英語：Last day です。

(例：ヨハネ 11:24,6:54)

どちらも、日、時と訳し得ますが、オラはエメラーに比べて、さらに短い時間、時点、瞬間なども表します。エスカター オラは「最後の方のある時点」というニュアンスがあると思えます。

(エスカター エメラーについては、資料「47 「終わりの日」の預言と「終わりのしるし」の相違点」を参照して下さい)

(反キリストが)「現れている」と訳されている「ギ語：γεγόνασιν」の単語の解析記号を示しますと[V-2RAI-3P][動詞 - 第二現在完了 - 能動相 - 直接法 - 三人称]です。

しかし、(それによって終わりの時を)「私たちは知る」と訳されている

「ギ語：γινώσκουμεν」の単語の解析記号は[V-PAI-1P][動詞 - 現在 - 能動相 - 直接法 - 一人称]であり、反キリストは確かにすでに現れた後ですが、それを「知る」は完了(過去形)ではなく、現在形です。

これはつまり、「今が終わりの時であることをすでに知った」という意味ではなく、

「知るようになる」もしくは将来知る事を示唆していると言えます。

ギリシャ語では、将来のことを現在形で記すのは一般的なことです。この単語のこの語形（「ギリ語：γινώσκομεν」）としての使用は聖書中に全部で10箇所出て来ますが、そのうち8箇所はヨハネ第一で使われています。（ヨハネ第一 2:3, 2:5, 2:18, 3:24, 4:6, 4:13, 5:2, 5:20）これらの使用例はほとんどどれも、「〇〇によって、〇〇を知る」という文体で書かれており、ヨハネ第一の内容全体に渡っています。つまりその手紙の目的の一つは、「聞いていたことを、何によって知る、つまり確認できるかという手法を示すために書かれている」とも言うことができます。そしてそれらは、すでに確認したというより、むしろこれからそのようにして知るようになるという視点で記しています。

さて、このヨハネ第一 2:18を理解するに当たって、参考にできる記述は、パウロの記したテサロニケ第二 2章の記述でしょう。

「…しかし、兄弟たち、…エホバの日が来ているという趣旨の靈感の表現や口伝えの音信によって、…すぐに動揺して理性を失ったり、興奮したりすることのないようにしてください。…なぜなら、まず背教が来て、不法の人つまり滅びの子が表わし示されてからでなければ、それは来ないからです。…確かに、この不法の秘事はすでに作用しています。しかしそれは、今のところ抑制力となっている者が除かれるまでのことなのです。まさにその時になると、不法の者が表わし示されますが…」（テサロニケ第二 2:1 - 9）

「エホバの日」である終末期に現れるとされる「不法の人、滅びの子」こそ、「反キリスト」の権化です。パウロは、この者が現れていない限り、誰が何を言おうとまだ「終わりの日」ではないということ力を説いています。

しかし、この時点ですでに現れているものがありました。それが「不法の秘事」です。つまり「抑制力」となっているものが働いていた西暦1世紀において、未だ「反キリスト」の親玉、不法の人は現れていませんが、個々の「反キリスト」はすでに現れており、それをパウロは「不法の秘事」と表現しています。（この点の詳細は、資料「39 反キリストの権化「不法の人」の正体を暴く」をご覧ください。）

サタンの惑わしによってクリスチャン会衆内の中から、密かに出て来るそうした者たちの言動があらさまになった時、「反キリスト」であることがはっきりします。

ヨハネが、続く節で記しているのは、そうした個々の「反キリスト」のことです。

「彼らはわたしたちから出て行きましたが、彼らはわたしたちの仲間ではありませんでした。」（ヨハネ第一 2:19）

それで、上記のパウロの言葉を良く知っていたであろうヨハネが、仮に「多くの」反キリストであろうと、「わたしたちから出ていった」個々の人々の故に、今（手紙を書いた時点）が「エホバの日」であり、キリストから聞いていた「終わりの時」であると結論するであろうはずはなく、したがって、ヨハネのこの句を、そのように読み取るのは間違いでしょう。

恐らく、ここは、「終わりの時」を確認する手だてとなるキーワードが「反キリストの出現」であることを示そうとしているのだと考えるのが当を得ていると思えます。

それで、結論として、このヨハネ第一 2:18はおおよそ次のような意味であり、そのように訳し得ると考えます。

「子供たちよ、

ちょうど、あなた方は反キリストが来るというのを聞いていたように

今でさえ、すでに、多くの反キリストが現れています。

それ（反キリストの出現）によって私たちは、最終の時点が分かるようになっています。

それが「終わりの時」です。」